

2 各班の研究事業とその成果

I 第1班 図像資料の体系化と情報発信

研究経過

1班は、財団法人日本常民文化研究所が編纂した世界に誇るべき『絵巻物による日本常民生活絵引』全5巻を前提に、図像を活用し、図像を窓口にして文化を把握するという、世界的に類例のない絵引という編纂方式を、普遍的な方法として提示することを構想して発足した。旧来の言葉を窓口にして事物・事象を知る字引に対して、図像を窓口にして事物・事象を知る方法が絵引である。『絵巻物による日本常民生活絵引』を引き継ぎ、以下の3つの課題を掲げて、研究活動を開始した。すなわち、課題①『絵巻物による日本常民生活絵引』の英訳を中心としマルチ言語版の編纂と出版、課題②日本近世・近代生活絵引の編纂とその一部の刊行開始、課題③東アジア生活絵引の編纂作業である。

なお、日本常民文化研究所が編纂したのは『絵巻物による日本常民生活絵引』とあるように「常民生活絵引」であったが、私どもの21世紀COEプログラムは「常民生活絵引」ではなく、単なる「生活絵引」とした。常民は柳田国男が用い、民俗学の基本的な概念になったが、常民にこめられた意味は基本的に一国民俗学の枠組みであった。世界的な研究を推進するには不適切な言葉であると判断し、本プログラムでは常民を採用せず、単に生活とした。

1班の活動は終始班としての活動を維持してきた。班員が課題に分属する方式をとらず、いずれの課題にも関わる方式を採用した。班としての研究会を頻繁に開催し、そこで各課題の問題や成果を報告・検討してきた。その結果を具体化する4年度か

らは、各課題担当者を決め、それぞれ分かれて研究作業を進めたが、完全に分離するのではなく、多くの班員が複数の課題に関わることで、班としての一体性の維持に努めると共に、引き続き班研究会を開催した。

1班としては公開ワークショップや講師を招いての公開研究会を開催して、すでに研究実績をあげている研究者からさまざまな刺激を受け、示唆を得る機会を設けると共に、自分たちが行っている研究の内容や進捗状況を広く披露し、批判を得る機会を作った。

各人は自己の研究課題を班の課題との関連で設定し、その具体的な研究のために日本内外に調査に赴いた。また、国内の博物館における図像資料の企画展示に際し、展示資料の確認調査を班として行った。これらの調査も個人で個別に行うのではなく、班として実施し、また課題を超えて実施すると共に、課題達成のために明確な目標を設定して行った。

理科系の共同研究は、実験装置・分析装置を共同利用して、研究成果も共同のものとして生み出され、学術雑誌にその成果が発表される場合も、参画した研究者の連名で行われるのが一般的であるが、人文系は個人的な研究活動として展開し、その成果も個人の名前で発表されることが多い。1班では、絵引編纂という共同課題を追究し、その成果も個人に還元するのではなく、共同研究としての成果としてまとまった絵引を完成させることに努力を傾注した。作業としては分担はするが、その内容を共同で検討し、共同の研究成果として絵引を編纂し、それを刊行することを目指した。

研究成果

1班としての成果は、先ず各課題ごとに刊行された絵引である。マルチ言語版『絵巻物による日本常民生活絵引』2巻4冊、『日本近世生活絵引』3冊、『東アジア生活絵引』2冊と、全部で9冊に及ぶ。先行して研究を進めたマルチ言語版の編纂過程で得た知見を、東アジア生活絵引に活用し、世界的に利用可能な絵引を目指して研究を行った。

COE研究員(PD・RA)の支援を得て、図像資料に関する文献の収集とその目録化を進め、『図像文献書誌情報目録』および『図像研究文献目録』を刊行した。前者は、近世・近代に描かれた図像が、近代の出版物の中に再録されたり復刻されたものについての書誌情報であり、今までにないデータベースである。

さらに、生活絵引データベースの構築を進め、その一部をホームページ上で公開した。公開できたのは、『日本近世生活絵引』のうち東海道編の副産物としての『東海道名所図会』絵引データベース、『東アジア生活絵引』のうち朝鮮風俗画編の副産物



班研究会



公開研究会

としての『朝鮮風俗画』絵引データベースである。これらは、従来の文字による検索に加えて、図像からの検索を可能にする「絵引検索」を設定したところに特色がある。

課題1 マルチ言語版『絵巻物による日本常民生活絵引』の編纂

研究経過

世界的に見て類例のないユニークな、過去に描かれた図像から情報を引き出し、発信する絵引という方式を日本常民文化研究所の先輩達が考案し、具体化した。それが『絵巻物による日本常民生活絵引』全5巻である。刊行されて半世紀あまりが経過した現在、『絵巻物による日本常民生活絵引』は日本史研究上の不可欠な工具書として普及し、研究室や研究者の座右に置かれ、活用されている。しかし、日本語による編纂物であるため、日本以外には余り知られてこなかった。日本研究のためにも、また図像資料の体系化のためにも、この『絵巻物による日本常民生活絵引』を日本以外の地域や文化へ発信することを構想して、この課題は開始された。

本COE期間中には、『絵巻物による日本常民生活絵引』全5巻のうち、第1巻と第2巻を対象に、描かれた事物に付された名称(キャプション)を英語、中国語、韓国語に訳し、さらに絵引に付された絵から読み取った解説文を英語訳して、世界的に利用可能な図像資料にすると共に、それを通して絵引という世界的に類のない図像活用方式を提示して、絵引を世界的な共通方式にすることを目指した。

生活事象を表現する言葉を異なる文化に訳して示すことは多くの困難が伴うが、特に特定文化の過去の事象を多言語で示すことは簡単ではないことが検討過程で明らかになり、それを克服するための研究に時間を多く割くことになった。そして、本プログラムの大きな目標の一つが、若手研究者の育成にあることに鑑み、異文化の言語に翻訳する基礎作業には、各言語を母国語とする博士課程在学中もしくは修了の日本社会・文化を専攻する留学生に依頼して、グループを組織して進めた。翻訳に参加したのは神奈川大学大学院の学生のみでなく、東京大学大

学院その他の多くの留学生である。この若手研究者である留学生諸氏の尽力によって訳出された各言語の内容を、班員が詳細に検討し、適切な語彙を確定した。この間の研究会はほぼ毎週、夜遅くまで行われた。

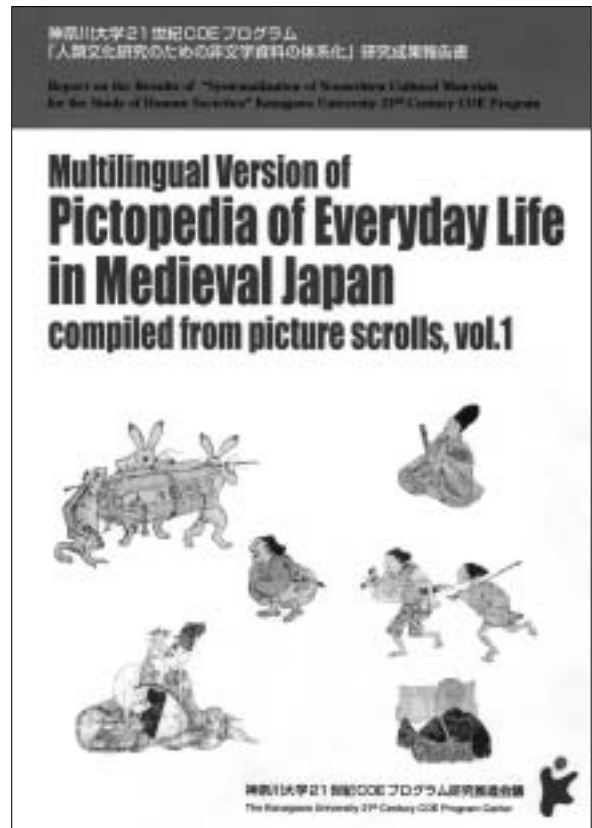
この翻訳・校閲の過程で、『絵巻物による日本常民生活絵引』編纂の問題点も明らかになってきた。当時の研究水準に規定されて、必ずしも適切な語彙が選択されていないことが判明した。そのため、『絵巻物による日本常民生活絵引』そのものの改訂も考えられたが、今回はあくまでも原著を前提に編纂することに重点を置き、間違いについては最小限の訂正に止めた。また、和歌や長文の引用文は、他言語に訳出することが困難であり、要約して訳したり、一部省略したりすることで、異文化からの理解を容易にするよう工夫した。

『絵巻物による日本常民生活絵引』という書名を英語に訳す際に問題になったのは絵引であった。欧米には絵引という編纂方式がないのであるから、当然のことながら絵引に相当する用語も存在しない。類似の表現を検討したが、結局、絵引の独自性・独創性を表現するために新しい用語として Pictopedia を作りだして用いた。図像から広く情報を引き出し、発信するという意味を込めた用語であり、絵引の編纂方式の普及と共に Pictopedia も定着していくものと予想している。

研究成果

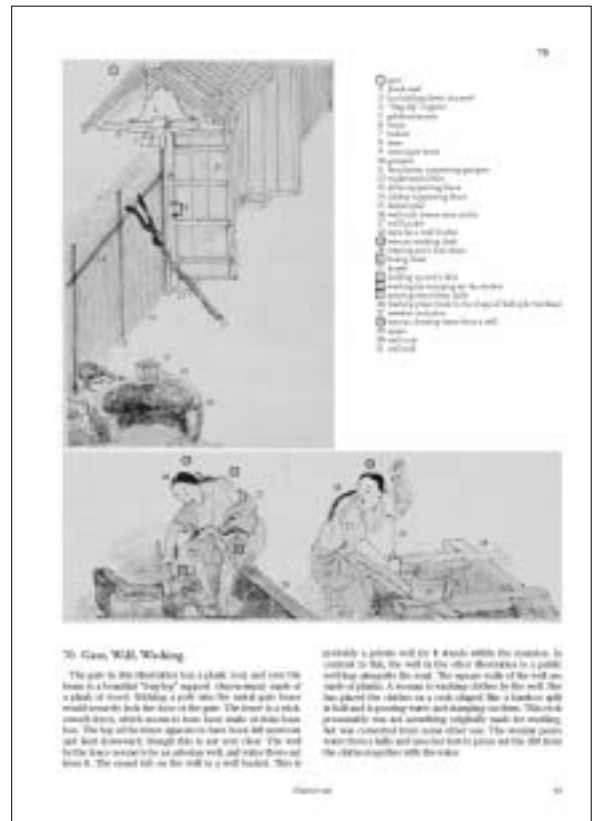
『絵巻物による日本常民生活絵引』は全5巻の刊行物であるが、今回の21世紀COEプログラムの5年間では、そのうちの第1巻と第2巻をマルチ言語版として編纂し、刊行することにした。それぞれ、本文編と語彙編の2分冊で編成した。本文編は、『絵巻物による日本常民生活絵引』の図像、キャプション、読み取り解説を英文によって表記するもので、英文版『絵巻物による日本常民生活絵引』としての性格を有する。英語を解する人々にとっては、この本文編のみで日本文化を研究する際の工具書となるし、また日本中世史を図像から理解する案内書となる。しかし、本文編に加えて語彙編を編纂した。

こちらは英語、日本語、中国語、韓国語をキャプション番号に対応させて比較対照できるようにしたも



研究成果報告書

マルチ言語版『絵巻物による日本常民生活絵引』第1巻 表紙



研究成果報告書

マルチ言語版『絵巻物による日本常民生活絵引』第1巻 本文

のである。日本の事象を各言語でどのように表現するのかを検討する格好の資料集であり、また各言語から『絵巻物による日本常民生活絵引』を読み、利用できるようにしたものである。

当初はフランス語も予定し、作成作業に入ったが、十分に研究者を組織することができず、この5年間の研究計画からは除外し、他日を期すことにした。また、キャプションとして英語表記が困難な語句も少なくなかった。それらについては、やむを得ず日本語の表記をローマ字で示した。日本語のままでは日本語を解さない多くの人々に多大の不便をかけることになる。そこでそれら日本語のローマ字表記で残した語句について、簡単な説明をする辞書を準備し、語彙編に掲載する予定であったが、準備が整わず、次の機会に譲った。

3回にわたる本プログラムの国際シンポジウムにおいて、海外から参加した研究者からは、このマルチ言語版絵引編纂という試みは高く評価され、賞賛された。この編纂によって、絵引という編纂方式が世界に提示できたと評価できよう。コロンブスの卵で、これをモデルにして、世界各地でそれぞれの図像についての絵引の編纂が行われるものと予想される。

課題2 日本近世・近代生活絵引の編纂

研究経過

『絵巻物による日本常民生活絵引』の成果を前提に、かつて日本常民文化研究所が構想しつつも実現できなかった、日本近世・近代の生活絵引の編纂を課題にした。当初は近世生活絵引と近代生活絵引を並行して編纂を進める予定にしていたが、実際の編纂計画を策定する中で人員と時間の制約で達成が困難であると予想されたので、今回の21世紀COEプログラムの5年間では日本近世生活絵引の編纂に集中し、日本近代生活絵引の編纂は他日を期すことにした。

近世生活絵引については、どのような図像を対象にし、どのような構成にするか検討した結果、地域別にそれぞれの地方の特色ある図像による絵引編纂を進めることにした。COE期間中には、北海道・

蝦夷地編、日本本土編、琉球編という大枠での編纂を計画した。北海道・蝦夷地編については前半に継続的に図像資料の所在調査を進め、図像も収集し、その中から絵引編纂に適切な図像を選択して、絵引編纂を進めた。中心となったのは、菅江真澄の描いた図像であり、また各種の風俗絵である。他方、琉球編については、図像資料所在調査を進め、その所在情報をほぼ入手したが、並行しての調査とそれによる編纂は困難と判断し、北海道・蝦夷地編の編纂の終了後に行うことにした。日本本土については膨大な図像資料が存在し、それをどのように絵引にまとめるかは大きな問題であり、検討を重ねた結果、神奈川大学日本常民文化研究所が所蔵する図像資料を対象にすることにしたが、検討の結果、同じ種類の図像で、より内容が豊かな表現描写がある『農業図絵』（『日本農書全集』第26巻）を用いて北陸編の編纂を行うこと、また21世紀COEプログラムが入手した『東海道名所図会』による絵引編纂を行うことにした。『東海道名所図会』による絵引編纂は、他の図像資料が図像そのものとして独立しているのに対し、挿絵であり、描き方に個性が乏しい。しかし、描く対象が京都から江戸までの広域であり、地域差も見られることに注目した。

日本近世生活絵引は、以上のように、北海道編、北陸編、東海道編の3冊の絵引編纂を進めた。『絵巻物による日本常民生活絵引』に倣い、対象作品から生活文化を描いている部分を適格に切り取り、そこに描かれている事物、また人物の行為をとりだして番号を付け、その事物や行為を示す言葉をキャプションとして表示した。近世に描かれた図像を用いて、近世の生活絵引を編纂するのであるから、表示する語彙も近世に用いられたものをできるだけ確認しつつ掲げるようにしたが、これが予想外に困難な作業であり、実際には近世にその地で何と呼んでいたか分からない場合が多く、一般的な現代表現を採用せざるを得なかったキャプションも多い。またアイヌの人々の生活文化を日本語で表現することも非常に困難な問題であった。

これら試行錯誤を通しての検討において共同研究の真価が発揮された。一つの事物に関するキャプシ

ョンにどの語を与えるかについて激論を交わすこと
 もしばしばであった。共同作業を通して一つの結論、
 一つの答えを引き出すという点において、人文系の
 共同研究のあり方を示したと言える。この間、講師
 を招いての各種研究会を開催し、現地調査を実施し
 た。またそれぞれの資料についてすでに研究を重ね、
 蓄積のある多くの研究者の教示を得た。

研究成果

共同研究方式による編纂書として、『日本近世生
 活絵引』北海道編、北陸編、東海道編の3冊を刊行
 することができた。それぞれ絵引としては試案本と
 もいうべきものであり、十分に完成したものではな
 い。しかも、それぞれの研究状況を反映して、統一
 した形式の絵引にはなっていない。むしろ絵引の方
 式としてどのような構成・組み立てが相応しいかを
 検討するための材料になるように、それぞれ異なる
 形式の絵引とした。北海道編は、事項に対するキャ
 プションは必ずしも多くないが、詳細な読み取り解
 説を付け、現代の研究水準を示した。東海道編は、
 『絵巻物による日本常民生活絵引』の方式を踏襲し

て、選択した図について事項キャプション、読み取
 り解説を付けた。そして、編纂過程で得た知見を解



研究成果報告書
 『日本近世生活絵引』北陸編 表紙



研究成果報告書
 『日本近世生活絵引』北海道編 本文



研究成果報告書
 『日本近世生活絵引』東海道編 本文

題と考察として収録した。北陸編は、農書としての図像部分は簡略にし、金沢城下の生活を重点的に取り上げ、絵引化した。

印刷・刊行した3冊の絵引に加えて、副産物としての絵引データベースを作成して公開した。データベースは、3冊総てではなく、『東海道名所図会』についての絵引データベースのみを今回は公開した。従来のデータベースは文字から検索して、目的のデータに達することを基本にしてきた。今回のデータベースでも、文字を入力して検索する方式に多くの利用者がなれていることもあって、これを字引検索という名称を与えて設定したが、加えて絵引データベースの真価を発揮するための図像から検索する方式を模索し、データベースの検索窓口として絵引検索を設定した。

課題3 東アジア生活絵引の編纂

研究経過

日本で考え出された絵引という情報整理と発信の方式が、日本以外の社会、文化においても可能かどうかを検討するために、東アジアの2つの文化について絵引編纂を行うことを課題に設定した。一つは中国であり、もう一つは朝鮮半島である。

日本では中世でも図像が豊富で、絵引編纂を可能にするほどの量が残されていたし、まして近世以降になると日常生活の中に図像が豊富に入り、人々は図像に日常的に接し、また時には写生や模式として自ら図像を作成し、情報伝達や記録として残すことが行われてきた。日本においては、絵引編纂の前提が、各時代にすでに作り上げられていた。

それに対して、東アジアの諸地域では、図像と日常生活の間は日本ほどに近く、親しみのあるものではなかったことが分かってきた。確かに絵画が多く制作され、家の中に飾られることも少なくなかったが、山水画や花鳥画に示されているように、そこに描かれた内容は実際の景色や人々の生活ではなく、理念化された風景であり、人間であった。そのため、絵引編纂の対象となるような写実的に生活場面を描いた図像を探し出すことに多くの時間を費やした。

種々検討した結果、中国については18世紀の蘇

州を描いた12メートルに及ぶ画卷「姑蘇繁華図」に注目し、「姑蘇繁華図」に基づく生活絵引編纂を行い、『東アジア生活絵引』中国江南編として完成させることにした。朝鮮半島については、やはり18世紀を中心に多く描かれた風俗画の中で生活を描いたものを選択して絵引編纂を行い、『東アジア生活絵引』朝鮮風俗画編とすることにした。

絵引編纂を行うためには、印刷・刊行された図録類のみに頼っていたのでは、その詳細を把握することはできない。実際に作品を熟覧して、描写を子細に観察し、特徴を把握することが必要である。5年間の共同研究の過程で、中国および韓国を訪れ、現地において所蔵機関の厚意ある対応で、各作品の熟覧をした。また中国の「姑蘇繁華図」は江蘇省蘇州を描く絵画であるとされることから、写実的であればあるほど、現地調査をし、現地比定することが必要である。そのために数次に及び現地調査を行った。そして、中国および韓国の研究者との交流や研究会も催し、それらの絵画についての中国および韓国の研究蓄積から学んだ。

中国江南編については、「姑蘇繁華図」から50場面を切り取り、それについて事物と行為に番号を付け、キャプションを与え、また場面全体の読み取りを行った。朝鮮風俗画編の場合は、朝鮮時代の風俗画の中から生活を比較的具体的に描いている6作品を選び、それらの中から生活場면을示す50余りを選択して、絵引編纂の対象とした。絵引編纂を開始してみると、多くの問題点が浮上して、編纂は困難を極めた。

最も大きな問題は、中国および朝鮮半島の生活を日本語で把握し表記することの困難性であった。事物を知っても、それを日本で誤解されないように日本語で表記することは、単なる語学辞典で訳を取りだして当てはめることではすまないことが明らかになり、一つ一つの語の適切なキャプション付けに多くの時間を割くことになった。最後までその検討と修正は続いた。

次には、日本には存在しなかったり、類似のものもなかったりする事物も、同じ東アジアでも生活面では少なくないことが明らかになってきた。キャプ

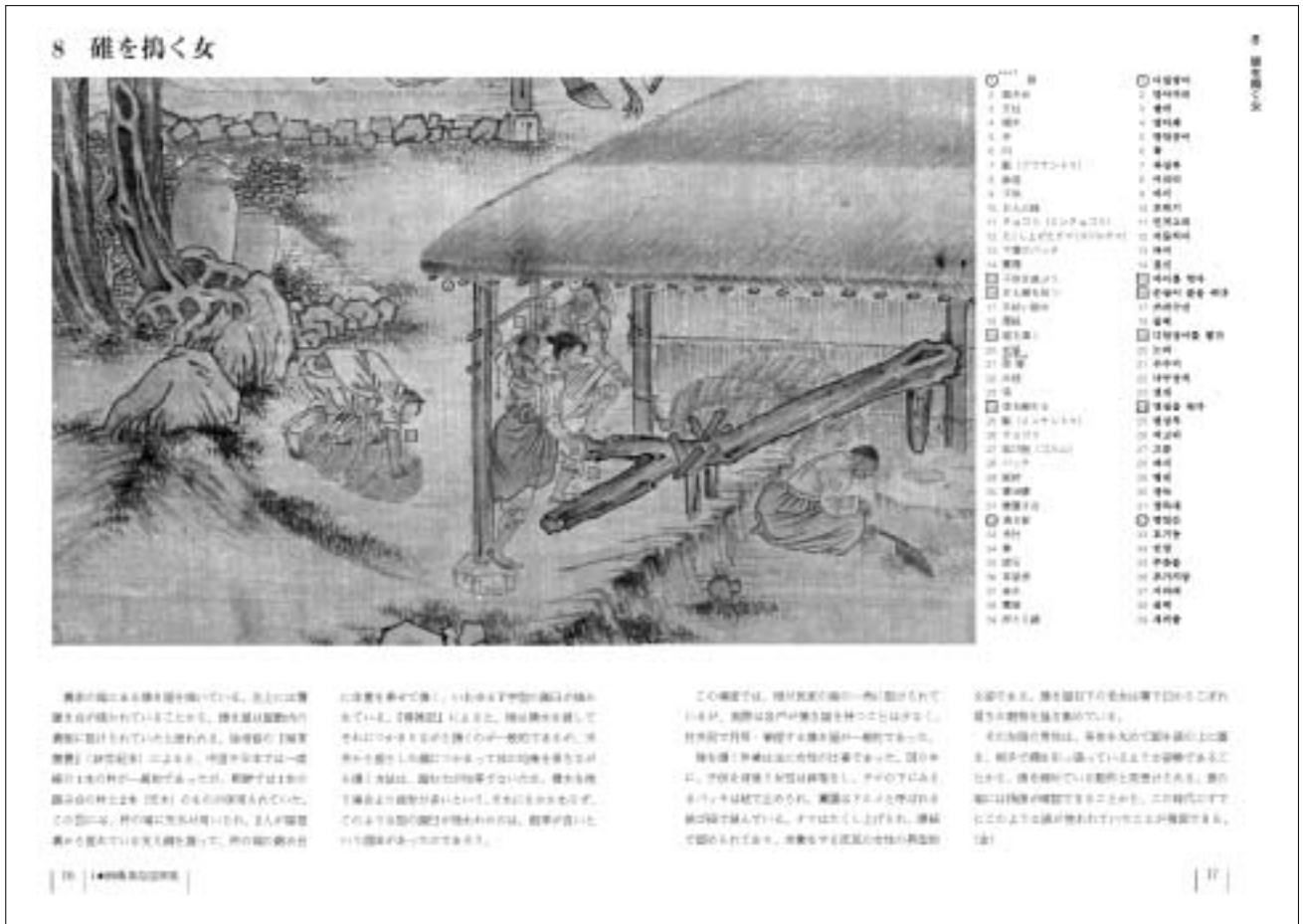
ジョン付けがこの点でも難しいことが判明した。この点を少しでも克服するために、朝鮮風俗画編では、一つはキャプションを日本語表記と韓国語（ハングル）表記の2本立てにすることで理解しやすくし、さらに巻末の索引も日本語と韓国語の二種類を作成し、日本語索引には日本語では理解が難しい難解重要単語に簡単な解説文を付けることを試みた。これらの試みは今後の韓国文化理解にも大いに参考になるものと自負している。そして、この過程を共同研究として進め、一つの作品に結実させたことは、人文系の共同研究のあり方をも示したものと考えている。

研究成果

研究成果は『東アジア生活絵引』中国江南編、朝鮮風俗画編の2冊として印刷・刊行した。いずれもカラーの絵画作品であるので、その特長を生かして、絵引もカラー印刷にした。中国江南編は、日本語表記に加えて、必要に応じて中国語を併記し、誤解が生じないように工夫したが、全体としては現代日本



研究成果報告書
『東アジア生活絵引』中国江南編 表紙



研究成果報告書
『東アジア生活絵引』朝鮮風俗画編 本文

語によるキャプションとなった。朝鮮風俗画編は日本語キャプションだけでなく、総ての語彙に韓国語(ハングル)でのキャプションを付けた。このことによって、日本語を解さない韓国・朝鮮の人々の利用も可能にし、同時に日本語と韓国語との対応関係を図像に媒介させることによって明確に示すことができた。この試みは今後の比較文化研究に大いに貢献するものと思われる。

この2冊の絵引によって、日本で作り出された絵引という編纂方式が、他の社会、他の文化でも可能であり、また必要であるということを示すことができた。図像の作成量は少なく、また残存量も少ない社会においては、絵引編纂の対象にできる図像資料は限られているが、適切に選択すれば、内容豊かな絵引編纂が可能であることを示し得た。

さらにデータベースの作成にも取り組んだ。今回公開の準備をしたのは、朝鮮風俗画についての絵引データベースである。これは絵を窓口にして検索できるように組み立て、しかも日本語のみでなく、韓国語や英語による検索もできるように工夫をしている。

1 班

福田アジオ(事業推進担当者、班代表、課題2・課題3)
菊池勇夫(共同研究員、課題2)
君康道(共同研究員、課題1)
金貞我(共同研究員<2003年度>・COE教員<2004~2007年度>、課題1・課題3)
小馬徹(事業推進担当者<2003~2004年度>)
佐々木睦(共同研究員、課題3)
鈴木陽一(事業推進担当者、課題1・課題3 課題代表)
田島佳也(事業推進担当者、課題2 課題代表)
中村ひろ子(COE教員<2004~2007年度>、課題2)
西和夫(事業推進担当者、課題2)
ジョン・ボチャラリ(事業推進担当者、課題1)
前田禎彦(共同研究員<2005年度>・事業推進担当者<2006~2007年度>、課題1 課題代表)
井谷善恵(調査研究協力者<2006年度>、課題1)
泉雅博(調査研究協力者<2006年度、2007年度>、課題2)

林淑姫(調査研究協力者<2005年度>)
韓東洙(調査研究協力者<2006年度、2007年度>、課題3)
金泰順(調査研究協力者<2005年度>)
アラン・クリスティ(調査研究協力者<2005年度、2006年度>、課題1)
巖明(調査研究協力者<2007年度>、課題3)
ティモシー・コールマン(調査研究協力者<2004年度、2005年度、2006年度>、課題1)
蔡文高(調査研究協力者<2007年度>、課題1)
尚峰(調査研究協力者<2006年度>、課題3)
サイモン・ジョン(調査研究協力者<2004年度、2005年度>)
鈴木彰(調査研究協力者<2005年度、2006年度、2007年度>、課題1)
鄭淳英(調査研究協力者<2007年度>、課題3)
富澤達三(調査研究協力者<2006年度、2007年度>、課題2)
中井真木(調査研究協力者<2005年度、2006年度>、課題1)
中野泰(調査研究協力者<2006年度、2007年度>、課題3)
林海涛(調査研究協力者<2003年度>)
ラクエル・ヒル(調査研究協力者<2003年度>)
ルシ・サウス・マクレリー(調査研究協力者<2006年>、課題1)
ロジェ・ヴァンジラ・ムンシ(調査研究協力者<2005年度>)
山本志乃(調査研究協力者<2006年度、2007年度>、課題2)
尹賢鎮(調査研究協力者<2006年度、2007年度>、課題3)
フレデリック・ルシーニュ(調査研究協力者<2005年度>)
王京(COE研究員(PD)<2006~2007年度>、課題3)
佐々木弘美(COE研究員(RA)<2007年度>、課題2)
彭偉文(COE研究員(RA)<2006~2007年度>、課題3)

Ⅱ 第2班 身体技法および感性の資料化と体系化

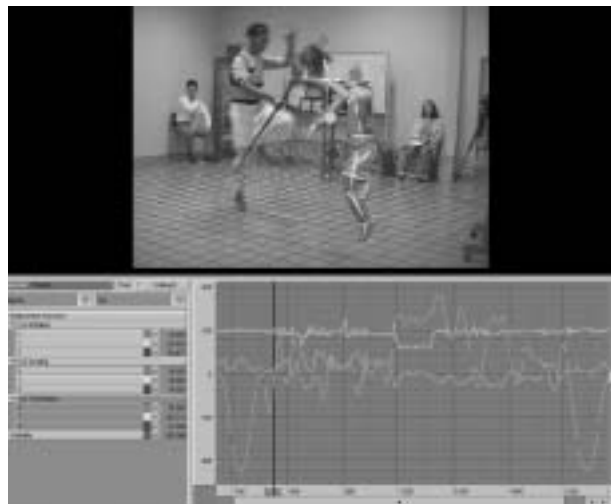
身体技法、つまり文化によって条件づけられた身体の使い方の比較研究については、人類史的立場から総合的に取り組み、その位置づけをより明確にするために、フランス、アフリカ、メキシコ、モンゴルなどを選び、調査を行った。一方、芸能研究のフィールドワークとしての取り組みは、中国、日本をフィールドとして、角度変化のデータを直接取得できる磁気式モーションキャプチャを用いて東アジアの民俗芸能と伝統芸能の定量比較を行った。その結果として、多くの新しい知見を獲得し、それらを随



班研究会



2004年9月内蒙古調査風景



調査風景 モーションキャプチャ収録

時日本内外の学界に報告し、また研究成果報告書に盛り込みとりまとめた。

用具と人間の動作の関係については、身体技法研究を通して何が見えてくるのかという視点から、東北地方・中部地方の木摺臼の形態比較に取り組んだ。木摺臼の形態の違いから作業姿勢が復原でき、作業姿勢は使い手の身体技法に規定されることから、日本列島に暮らしてきた人々の身体技法の違いを復原し、そこから古墳時代日本列島の民族分布をさぐるという構想をもった。調査研究の過程で、その仮説がほぼ論証できる展望を得た。その成果を研究成果報告書にとりまとめた。

これらの調査研究を通して、資料化の方法が従来明確になっていなかった身体技法および感性について、またそれらと密接に関係する用具についての資料化の方法を提示すると共に、それらの分析方法を開発し、一定の仮説を提示することができた。

課題1 身体技法の比較研究

研究経過

身体技法および感性は人類文化にとって普遍的であると同時に、それぞれの文化において独特のあり方を示している。しかも身体技法も感性も文字によって記録することが困難な事象であり、今までも文字資料として記録されることはほとんどなかった。人々が日常生活において表現する立ち居振る舞い、喜怒哀楽の表現を客観的に記録する方法を開発し、それによって資料化されたものを比較検討すること

を大きな課題としたのが課題1である。課題を追究する方向として、人類史的な枠組みの中で身体技法を把握することと、舞踊を中心とした芸能に表現される身体技法の記録法の開発とその結果の分析に重点を置いて研究を展開した。

人類史的立場からの総合的な取り組みとしては、課題代表者が日本、フランス、西アフリカの比較研究を通して「三角測量による文化比較」(2004)などを発表し、2005年の第1回国際シンポジウムでは基調講演「非文字資料から見る人類文化」を行い、その仮説的方法に基づいて調査を行い、その結果を分析し、身体技法の普遍性と地域性の析出に努力した。具体的には、2004年8月にメキシコ調査、2004年9月に中国内蒙古調査、2005年7月にモンゴル調査を実施した。さらに、感性に関しては2005年12月、フランスで調査を行い、嗅覚についての考察を深めた。

芸能研究のフィールドワーク分野においては、「身体技法と感性の接点に位置する芸能の身体表現のデータ化と定量比較」と題して、モーションキャプチャによる芸能の定量比較に取り組んだ。「型」によって身体表現が定型化・様式化される伝統芸能では、上演の場として舞台を意識するが、他方、民俗芸能は、祭儀の場を上演の場とし、神と人が一体となり、人々の希求する祓い清めや招福を意図した跳躍や、旋回の舞踊が繰り返される。この対照的な2つの芸能を比較するため、伝統芸能では能楽の観世流シテ方、民俗芸能では、奥三河の花祭り、中国江西省南豊県石郵村の儺舞の演者の実演によるデータを収録した。

研究成果

「非文字資料を検討する前提としての感性の諸領域についての考察」および「非文字資料としての身体技法の諸相についての考察」の2点を中心に考察を深め、以下の成果を得た。前者については、直立二足歩行の進化の過程で発達させ、退化させてきた諸感覚を、ヒトの文化全体、および、二重分節性をもった音声言語と、視覚二次元表象としての文字の特性との関連で考察した。後者については、運搬の

身体技法、作業姿勢における身体技法、舞踊における身体技法を、多文化間の比較によって検討した。主に対象とした文化は、日本、中国、モンゴル、フランスを始めとするヨーロッパ、ブルキナファソを始めとする西アフリカ、メキシコ、ブラジルなどである。

芸能のフィールドワークでは、身体表現が伝達しようとする心情や事柄と動作の間に普遍的に共通するものがあるかどうかを見出すため、モーションキャプチャを用いて、舞踊動作データを14個の関節をもつ人体モデルの形式に当てはめた映像の解析を進めた。得られた結果の統計学的処理を行い、動作特徴の抽出を試みた。またマジカルなステップとして花祭りの反閨のステップの分析を行い、モーションキャプチャデータの全方向から観察できる利点を活用した。キャラクターが動く映像を正面からの固定画面で出力した映像データに仕上げ、DVDにして付した。



研究成果報告書
『身体技法・感性・民具の資料化と体系化』表紙

課題2 用具と人間の動作の関係の分析

研究経過

20数年の民具調査の中で、木摺臼の地方による作業姿勢の違いから古代日本列島の民族分布が復原できるのではないかという見通しをたてていた。作業姿勢は使い手の身体技法に規定されることから木摺臼の全国調査に取り組みことにし、「身体技法の違いに基づく古代日本列島の民族分布の復原」を第1のテーマとした。資料のありそうなところだけを狙ったつまみ食い調査は、効率が良く都合の良い結果が得られるが、所詮は見込み捜査にすぎず、客観的・科学的な成果を得るには各県内の資料館をくまなく回る面的調査が条件となる。この方法では木摺臼はなかったが在来犁は良い資料があったというケースが起こりうる。そこで在来犁調査を並行して行うこととし、「非文字資料の体系化」を非文字資料の可能性の追究と方法論を確立・具体化し、在来犁から地域ごとの古代史を復原するという「民具からの歴史学」を目指した「民具という非文字資料の体系化のための在来犁の比較調査」を第2のテーマとした。

限られた費用・時間で全国をカバーするため、西日本については蓄積された調査データが使えるので東日本に調査を集中することとし、東北地方と中部地方に重点を置くこととした。2003年度は青森・岩手・宮城県を中心に延べ39日で90ヵ所、2004年度は秋田・山形・福島県を中心に延べ49日126ヵ所、2005年度は中部地方を中心に延べ54日171ヵ所、2006年度は中部地方の追加調査で延べ16日27ヵ所を調査した。木摺臼の作業姿勢では東北地方は南から北へ座位から立位への変化がつかめ、在来犁では研究史上空白だった中部地方で、犁型から6～7世紀を復原できる成果を得た。ただ1人で多くの資料を抱え込んだため整理に手間取っている現状である。



研究成果報告書
『身体技法・感性・民具の資料化と体系化』本文



研究成果報告書
『身体技法・感性・民具の資料化と体系化』本文

研究成果

1. 身体技法の違いに基づく古代日本列島の民族分布の復原

2003～2004年度の東北地方調査からは、木摺臼の分布は東西軸と南北軸で顕著な違いを見せるという興味深い事実が浮かび上がった。まず東西軸であるが、太平洋側の岩手・宮城・福島県では木摺臼の残存が顕著なのに対して、日本海側の秋田・山形県では土摺臼への移行が進行していて木摺臼があまり見られないという傾向が指摘できる。これは夏高温で冷害の心配の少ない日本海側は近世に米どころ化が進んでおり、効率の良い土摺臼への置き換えが進行したのであろう。また南北軸に関しては、南部の福島県は畿内から続く座位の縄引き方式、岩手県南部や山形県では、縄掛け穴に棒をつっこんでクランクとした押し引き棒方式があり、これは腰掛け操作である。岩手県中部は2本把手型、北部から青森県は4本把手型でいずれも立位操作となり、とくに4本把手型は大型化する。座位を嫌い腰掛け操作や立位に作り変えるのは、座位を苦手とする使い手の身体技法に規定されたものと考えられ、地理的位置からしても縄文系住民によるものと推測される。この点に関しては、外来の弥生人が日本列島に持ち込んだ鍬は、鍬平の板に柄を柄組みするのが一般的なのに対して、東北地方では幹から枝分かれする部位を使って鍬平と柄を一木造りで削り出す鍬が広く見られ、一木造りは森の民縄文人に顕著な技術であることからして、木摺臼の立位移行は縄文人の身体技法に基づくものという仮説はひとまず検証できたものと評価している。

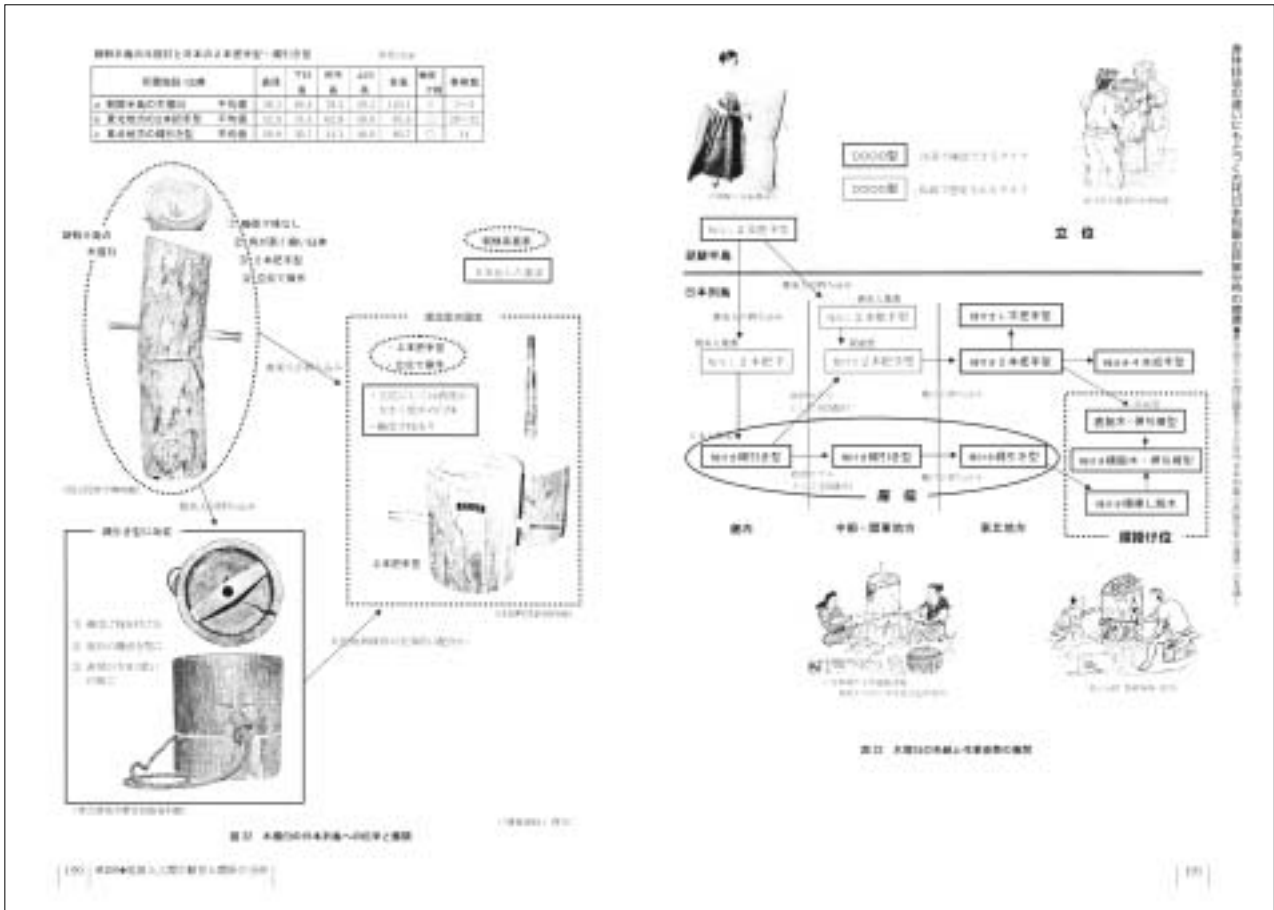
2. 民具という非文字資料の体系化のための在来犁の比較調査

中部地方は広く東北地方のように全域調査はかなわなかったが、富山県・山梨県はほぼ全域、長野県は一部、石川県・静岡県・三重県はごく一部を調査した。長野・富山・石川県では板へらをもった直轄長床犁が在来犁の基本形をなし、これは朝鮮系犁の上に大化改新政府が普及を図った政府モデル犁の波を被ったものと考えられ、6世紀に朝鮮系渡来人集落が分布していた痕跡と考えられる。富山県の原放

寺の犁は三角枠の朝鮮系の強い混血型で、朝鮮系渡来人の直系の子孫に伝承されてきた可能性が高い。静岡県も直轄長床犁という混血型で、6世紀渡来人に由来すると考えられる。

これに対して山梨県は非混血型の三角枠無床犁で、大化改新政府の長床犁導入・普及政策施行後の伝来と考えられ、巨摩郡という地名を勘案すれば高句麗難民の持ち込みと推定される。これは妻が馬代わりに引いて夫が押しながら操作するという夫婦犁や、男2人で犁轅と犁柄を持って鍬のように使う人力犁というバラエティーをもっており、難民入植時の困難な状況の中の工夫が定型農具として固定したという可能性が高く、「民具からの歴史学」の可能性の高さは立証できた。

混血型や非混血型など犁型から6世紀や7世紀と時代を読み分ける方法は西日本の調査から帰納的に導いたものだが、その妥当性が中部地方の犁からも検証できたことになる。



研究成果報告書
 『身体技法・感性・民具の資料化と体系化』本文

2班

川田順造（事業推進担当者、班代表＜2003～2005年度＞・共同研究員＜2006～2007年度＞、課題1）
 廣田律子（事業推進担当者、班代表＜2006～2007年度＞、課題1）
 芦澤玖美（共同研究員、＜2003～2005年度＞）
 梅野光興（共同研究員＜2003年度＞）
 落合一泰（共同研究員＜2003～2005年度＞）
 夏宇継（共同研究員＜2004～2007年度＞、課題1）
 楠本彩乃（共同研究員＜2004年度＞）
 河野通明（事業推進担当者、課題2 課題代表）
 長瀬一男（共同研究員＜2003年度、2005年度＞）

彭国躍（共同研究員＜2004年度＞）
 山口建治（事業推進担当者、課題1）
 岡本浩一（調査研究協力者＜2005年度、2006年度、2007年度＞、課題1）
 海賀孝明（調査研究協力者＜2004年度、2005年度、2007年度＞、課題1）
 金鋒（調査研究協力者＜2004年度＞）
 関根祥人（調査研究協力者＜2005年度＞）
 長瀬一男（調査研究協力者＜2004年度＞）
 國弘暁子（COE研究員（PD）＜2006～2007年度＞、課題1）

Ⅲ 第3班 環境と景観の資料化と体系化

第3班は当初「景観の時系列的研究」、「環境認識とその変遷の研究」、「環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解読」の3グループがそれぞれの課題を掲げ、研究調査を開始した。前半の3年間においては、3グループはそれぞれ有機的な関係を構築するための研究を行ったが、2006年度には班全体の再編成がなされ、他の班からも新しくメンバーを迎えて進める調査・研究体制が出来上がった。その体制の下ではグループ固有の研究課題の追究が優先されることとなり、相互の関連性を追究する面は後退したが、課題内部においては、それぞれ独自の研究成果をあげることができた。

2004年度に刊行した『環境と景観の資料化と体系化にむけて』において環境と景観に関する民俗学、地理学、歴史学の異なる分野からのアプローチが行われ、相互に共通認識を求める前提的作業を開始した。各領域をさらに深めるため、グループの再編成が行われ、課題1「景観の時系列的研究」、課題2「環境認識とその変遷の研究」、課題3「環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解読」に分かれ、それぞれの課題に応じた研究調査を展開した。

課題1においては日本常民文化研究所が所蔵する「澁澤写真」の撮影場所の特定を中心とする調査分析を、日本各地および韓国を対象に調査を行い、分析を進めた。

課題2においては西日本と東日本の特定地域を調査対象に定めたが、対象地が災害に見舞われるなどの事態が生じたため、調査が中断され、当初の計画が実行されなかった。後半2年間には中世鎌倉の発掘調査の考古学的成果から環境認識の変遷に関する考察を深めた。

課題3においては「海外神社」跡地、租界研究、関東大震災の絵葉書を研究素材とする3組に分かれ、それぞれの調査分析を行った。

これらの研究経過から判明してきたことは、人類文化としての非文字資料は、文字資料に対立的に存在するものではなく、文化総体の中で補完関係にあ



班研究会

ることであった。それは研究成果において実証され、再確認された。また、多くの写真類が物語る現実はずでに失われた景観であるため、分析の妥当性を広く世に問うために、それぞれのグループが追究する課題に合わせた写真類のデータベース化を図り、公開することにした。

課題1 景観の時系列的研究

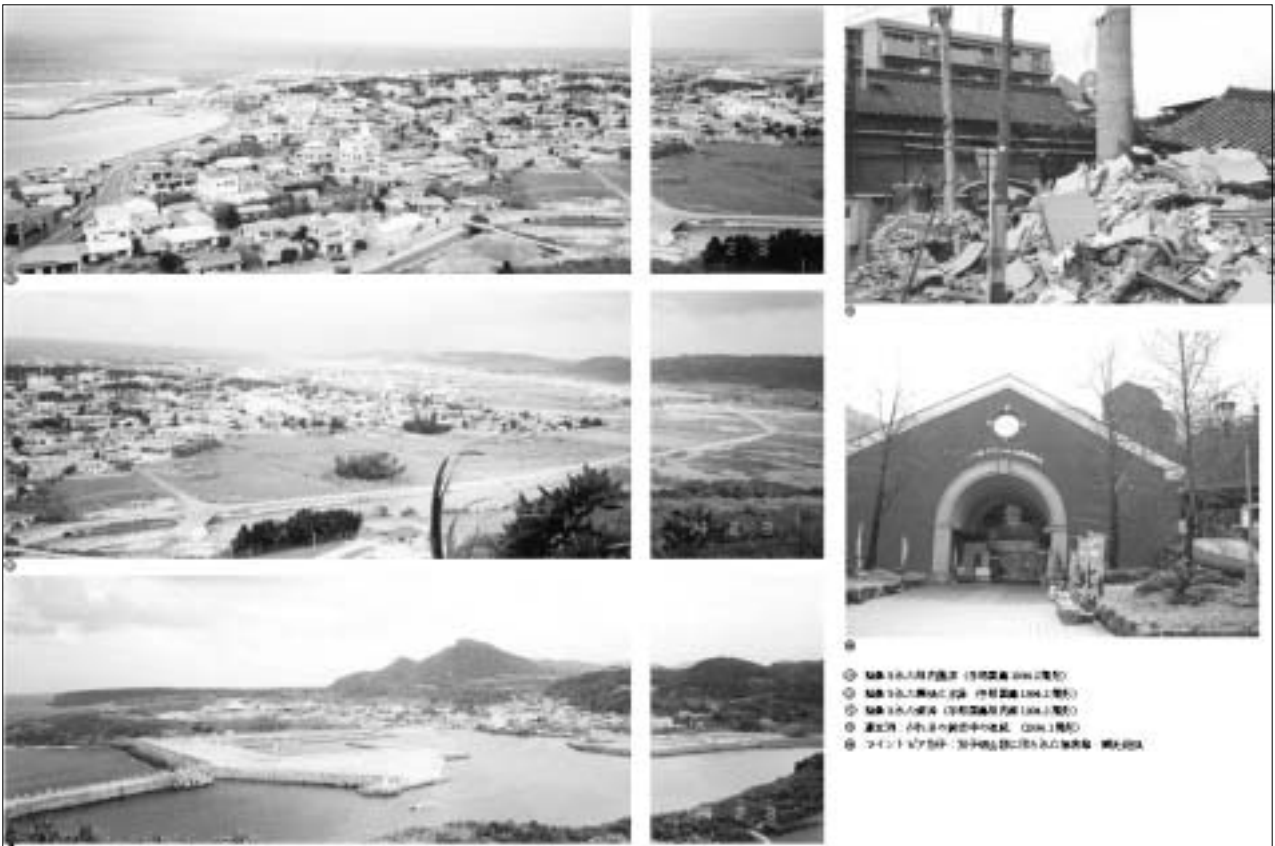
研究経過

課題1の景観の時系列的研究は、その作業の軸を日本常民文化研究所所蔵の「澁澤写真」の追跡調査、およびその一般公開にむけての準備作業においた。

最初の3年間は今からほぼ70年前に撮影された「澁澤写真」の撮影場所の特定、またその作業に関わるさまざまな聞き取りが中心となった。聞き取り作業は撮影時の証言を現地で求めることのほか、民俗学史の諸資料に基づき、撮影者を特定し、本人もしくはその遺族から聞き書きをし、また各種資料の提供を受けることで、当時の状況を少しでも洗い出



澁澤写真 牛耕（喜界島にては全く珍しい、殆んど馬耕である）
昭11. 4 於阿伝【目録番号：ア-5-4】



調査研究資料1
『環境と景観の資料化と体系化にむけて』口絵



研究成果報告書
『「景観」と「環境」についての覚書』本文

すことを目的とした。日本常民文化研究所の「澁澤写真」は紙焼き写真として残されており、ネガフィルムがない。その撮影者が不明な状態であるものが多く、その所有権には不確定な要素があるので、公開にさきがけて可能な限り写真の「由緒」を調べることとなった。

参画したメンバーは、素材となる「澁澤写真」を前にして、その撮影された時点や場所を特定するための着目点を出し合い、議論し、それを持参しての現地比定を行い、撮影以降現在までの長期的な景観変化を把握した。その主要な踏査地をあげると、2003年度に鹿児島県、広島県、東京都（新島）、2004年度に鹿児島県、2006年度には香川県及び鹿児島県、そして海外では2005年度に韓国の江原道、慶尚北道などで現地調査を行った。最後の2年間の主要な作業は、調査に基づく資料整理と各研究者による理論考察のとりまとめを行い、さらに現時点で公開可能な写真についての資料集の編集刊行に力点を置いた。その結果、当初刊行を予定していた2冊の「澁澤写真」の写真資料集のうち、鹿児島県大島郡喜界町の写真集1冊を刊行することができた。

研究成果

喜界島における「澁澤写真」の撮影場所の特定は、聞き取りなどにより一定の成果が得られた。写真を資料として正面に据え、300点の写真から例えば「浜」という場、あるいは人々の生活に密着した農耕馬としての「馬」に限定して探求することで、景観の時系列変化の内実を構成する要因とは写真として対象化されたものに限らず、それらを包む外在的要因、すなわち当時喜界島に押し寄せていた社会的変化の表出であることを把握することができた。

調査研究の過程で得た知見については、参画者が個別に論考を執筆して、『年報』の各号に発表した。また、課題の中間報告として『環境と景観の資料化と体系化にむけて』および『手段としての写真—「澁澤写真」の追跡調査を中心に—』を刊行した。また最終的な研究成果は『「景観」と「環境」についての覚書』としてとりまとめた。

課題2 環境認識とその変遷の研究

研究経過

課題2「環境認識とその変遷の研究」は、当初東日本と西日本の山間のむらの環境認識の変遷についての調査を計画した。

そのために調査研究対象地として、西日本では高知県長岡郡大豊町立川上名仁尾ヶ内、東日本では長野県上水内郡信濃町赤沢の山のむらで、いずれも焼畑や狩猟がかつて大きな比重を占めていたという共通性を持つ地域を選んだ。生活変化の激しかった高度経済成長期前後の50年ほどの生活の移りかわりを機軸にして、口頭伝承を中心に、現在を基点として両村落を比較する形で調査を行い、その結果を報告書にまとめる構想で研究に取り掛かった。

ところが、始まって2年目の秋、西日本の調査対象地とした仁尾ヶ内は台風に襲われ、砂防ダムが全壊し、むらは大きな被害を受けた。このため、調査を一時中断せざるを得なかった。結局、むらが多少なりともその被害から立直るのに2年の時を要した。さらに東日本の場合は調査者側の諸般の事情により、調査の中断を余儀なくされた。そのため、不十分ながらも実際に調査を終えることができたのは



調査地航空写真（鎌倉）



調査地航空写真（岡山平野）

西日本の高知県のむらのみとなった。研究成果のとりまとめもそこに重点を置いた。

後半2年間の作業として新たな課題と調査対象を設定した。中世の鎌倉の環境を現在の生活世界とも関連させて多角的に研究することを構想し、中世鎌倉を専門とする考古学者との共同作業を行った。ただし、この作業も考古学研究者の参加がやむを得ない事情で1年に限られたため、必ずしも十分な成果を結実させることができなかった。

最終年度にいたり、これまでの調査研究で収集した資料や研究成果を基に、今後の研究の進展を図るための整理と検討を行った。

研究成果

「環境認識」とは研究担当者自身の言葉で言い換えれば、人が生活するために環境にどう働きかけ環境を把握してきたかという民俗学の蓄積が活用できる場であると捉え、海人の日常に密着して調査した事例と焼畑村の生活暦からの事例で検証した。しかしながら、環境へ働きかける主体の側への視座を同時にあわせ持つものでなければ環境の変容だけを捉

えても主体すなわち人間を含む総体としての環境を把握したことはない。この点は今後の課題としておきたい。

課題3 環境に刻印された人間活動 および災害の痕跡解読

研究経過

課題3においては、戦争、占領、災害などで消滅した景観を写真を多用することで復原し、その変容の意味を問うことを共通の課題とした。研究課題として掲げる景観のみならず、研究素材として用いた写真類それ自体も「非文字」として位置づけられるべきものである。これら素材として用いた写真類が作成された時代は、撮影する主体と対象との間に政治的・社会的緊張関係を孕む1920年～1930年であった。したがって、写真に込められた意図や意思をその背景を踏まえて読み解くことがまず必要とされた。

課題は大きく三つの研究テーマを設定し、それぞれが共同研究を展開した。その三つのテーマは、「海外神社」跡地研究、租界研究および災害痕跡研究である。前二者は、共に現地調査を進め、現地において聞き取りなどを行い、戦争による侵略、原風景としての景観の占領後の変容とその要因を分析した。災害痕跡研究は主に関東大震災の写真絵葉書類を収集し、地図に落とすことを通して、それらが特定の対象に集中すること、さらにはこれら写真絵葉書類が関東大震災に関する人々の震災像をひとつの形に収斂させていくことを検証した。

また、それぞれのグループが追究する課題に合わせた写真類のデータベース化を図り、公開することにした。

〔「海外神社」研究〕 「海外神社」跡地調査を2003年度旧樺太南西部（12社）、2004年度旧南洋群島（20社）、2005年度旧朝鮮（18社）、2006年度旧満州満鉄附属地（10社）で行った。データベース構築のために、「海外神社」の写真、地図、絵葉書などを収集し、また、実地調査した跡地については実測図を作成して、「『海外神社』跡地に関するデータベース」の作成を行った。

〔租界研究〕 主として中国における旧日本租界

に関する現地調査を漢口、上海、天津、青島などで行い、台湾の国史館、中央研究院、上海市档案馆などで資料の収集を行ってきた。それらの活動の成果を発表すべく、2007年には「中国における日本租界研究」、「中国進出の日本企業とその建築—戦前の紡績業を事例として」の2回ワークショップを開いた。また、戦前中国の日本租界関連データベースの作成を行った。さらに、豊臣秀吉の朝鮮出兵時に建造された倭城の性格について、「朝鮮蔚山合戦之図」等の分析を行った。

〔災害痕跡研究〕 幕末から関東大震災まで70年間ほどの期間の災害に関わる絵図、写真を収集し、災害メディアとしての歴史的特徴についての分析を行い、成果論文を発表した。また、収集資料に基づく2件のデータベースを作成した。2005年度には近世・近代移行期のメディアに関する専門家によるシンポジウムを開催、2006年は「歴史災害と都市」についての立命館大学とのジョイントワークショップを開催、報告書を作成した。2007年『「名所江戸百景」と江戸地震」データベースをホームページに掲載、2008年「関東大震災・地図と写真のデータベース」を作成した。

研究成果

〔「海外神社」研究〕 戦前、アジア・太平洋地域に建てられた約1600社の「海外神社」の内、105社の跡地を調査したが、そこから得られた結論の第1は、「海外神社」跡地の景観の変容は①「改変」、②「放置」、③「再建」、④「復活」の4つの類型に分けられるということである。

第2に、このように異なる景観変容をもたらした要因として、以下の5点を析出した。①は戦後における日本と「海外神社」が建てられた当該国家・地域との関係を含む政治的要因である。②は日本及び当該国家・地域における社会的変動である。③は当該国家・地域における経済的発展の度合いである。④は当該国家・地域における文化伝統の問題。そして⑤は当該国家・地域における政治的・宗教的な支配勢力交代の「刻印」という問題である。さらにその上で、以上の5つの要因はそれぞれ相互に絡み合

い、また増幅、あるいは消去し合いながら、「海外神社」跡地の多様な景観を形作っていることを明らかにした。

【租界研究】 戦前に中国の数都市に置かれた日本租界の現況、特に街路、工場やそれに付設した日本社宅、中国人労働者住宅の現状について、現地調査を行い、現地に住む中国人への聞き取りを含む調査を行い、加えて建設当時の写真や図面、文字資料を収集分析することで、日本人が住んでいた当時の実態やその後現在に至るまでの変化を跡付けた。総じて、日本人が住んでいた当時の空間は現地から孤立したものだったが、日本人が去った後には、街路や建物をそのまま利用しつつ現地に溶け込む空間へと変化していったことを明らかにした。

また、朝鮮における倭城が、古来現地にあった邑城とは性格を異にして、侵略拠点の役割を担うものであったことを、合戦図や屏風絵を分析し文字資料で補強することで明らかにした。

【災害痕跡研究】 幕末から明治中期に至る錦絵、石版画、銅版画、写真とめまぐるしく進展するメディアの技術的發展と社会的受容を跡付ける前半の研究成果と、後半の関東大震災の絵葉書を中心とする研究成果を通じて、メディアの近代化、大衆化の過程をほぼフォローすることができた。近世から近代への転換期のメディア変遷史として位置づけが可能なこれらの時期の特徴は、従来から大衆に親しまれてきた錦絵類と西洋からの技術の導入によって切り開かれたメディアの新領域が相拮抗する状況から新メディアが徐々に大衆化する過程でもある。さらに、災害メディアとしての特徴をあげるならば、貧富の差なく襲う災害では一時的に従来の階層性が消去される瞬間を現出させる。そのため、社会的利害を超えた感覚が蘇生、自他の被害に敏感に反応する状況が生み出され、社会的関心が媒体としての特定のメディアとその情報内容に過度に集中する傾向が強くなることを明らかにした。

3班

香月洋一郎（事業推進担当者、班代表、課題1 課題代表・課題2 課題代表）

大里浩秋（事業推進担当者〈2006～2007年度〉、課題3）

河野眞知郎（調査研究協力者〈2005年度〉・共同研究員〈2006年度〉、課題2）

北原糸子（事業推進担当者、課題3 課題代表）

金子隆一（共同研究員〈2006～2007年度〉、課題3）

鈴木廣之（共同研究員〈2005年度〉）

須山聡（共同研究員〈2003年度、2005年度〉）

孫安石（事業推進担当者〈2006～2007年度〉、課題3）

田口洋美（共同研究員〈2004年度〉、課題2）

津田良樹（調査研究協力者〈2005年度〉・共同研究員〈2006～2007年度〉、課題3）

鄭美愛（共同研究員、課題1）

富井正憲（共同研究員、課題1・課題3）

中島三千男（事業推進担当者〈2003～2006年度〉、課題3）

八久保厚志（共同研究員、課題1・課題2）

浜田弘明（共同研究員〈2004～2007年度〉、課題1）

原信田實（共同研究員〈2003年度〉・調査研究協力者〈2005年度〉）

増野恵子（共同研究員〈2004年度〉・調査研究協力者〈2005年度〉）

三鬼清一郎（事業推進担当者〈2003～2005年度〉・共同研究員〈2006～2007年度〉、課題3）

上田純広（調査研究協力者〈2007年度〉、課題3）

貴志俊彦（調査研究協力者〈2005年度〉）

高坂嘉孝（調査研究協力者〈2007年度〉、課題1）

西田幸夫（調査研究協力者〈2007年度〉、課題3）

平山康典（調査研究協力者〈2006年度〉、課題3）

藤永豪（調査研究協力者〈2006年度〉、課題1）

堀内寛晃（調査研究協力者〈2006年度、2007年度〉、課題3）

諸井孝文（調査研究協力者〈2006年度〉、課題3）

李善愛（調査研究協力者〈2004年度、2007年度〉、課題1）

土田拓（COE研究員（RA）〈2006～2007年度〉、課題1・課題2）

本田佳奈（COE研究員（PD）〈2006年度〉、課題1）

劉湯水（COE研究員（RA）〈2007年度〉、課題3）

IV 第4班 地域統合情報発信

研究経過

第4班・地域統合情報発信班は、当初「文化情報発信の新しい技術の開発」を主題に、1～3班による非文字資料の体系化作業と共同しながら、①地域文化情報として統合的に発信するシステム、そして②その新技法に習熟した専門学芸員（シニア・キュレーター）養成方法の開発を目指し出発した。②は3年後、実験展示班として独立編成になり、本COEの成果を発信する方法としての実験展示を研究実施する活動とその人材養成策としての大学院における高度専門職養成の検討も含め、研究を展開することとなった。

①非文字資料の資料化、データ化、体系化の手順を踏まえての公開をソフト、ハードの両面から扱う対象地域として、国内では、福島県只見町において民具・民俗・文書・景観資料を民具使用動作・民具写真・実測図、民俗誌の裏付け、文書資料との整合へと進み、環境景観の変遷・比較（ダム建設以前以後）の作業を通し有機的に関連させ山村の生活構造モデルを時間軸で提示、地域性解明また地域振興のための情報発信の場としての博物館のあり方を提示した。

国外では、中国雲南省麗江にある東巴文化博物館・東巴文化研究所との協力関係の下に納西族の東巴儀礼・東巴文字・東巴經典の関係性を、身体技法（東巴儀礼）、画像化（象形文字）、文字化（東巴經典）、口承化（神話・年中行事）の諸相から把らえることを考え、初年度は、麗江、只見町において予備調査を行った。その結果、地域統合情報発信の場を只見町に決定した。只見町の選定理由は、地域住民の協力はもとより15年間に及ぶ町史編纂事業が終了し、各種文書類、民具、写真をはじめとした映像資料から地質、動植物などの自然誌資料までが網羅的に記録化・整理され、それらのおおよその関係性・体系性が16巻の町史本編・文化財調査報告書を参照することにより見通すことができ、これらさまざまな地域情報をクロスさせることにより只見町という山村地域の構造的な浮かび上がらせる可能性

が高いと考えられたからである。

3年度以降は、実験展示班の独立もあり、地域統合情報発信班では、只見町の地域統合情報をインターネット・エコミュージアムというシステムで発信する方法論に焦点を絞った。先述したように当初計画では、他班の研究成果、ノウハウに基づき、一地域である只見町の図像、民具、身体技法、景観のそれぞれの資料を統合的に重ね合わせて何が描けるかが班に求められた役割であった。例えば、田植えて実際に使われる民具を近世農書の記載・絵図と対照し、また民俗芸能である早乙女踊の田植えの所作と実際の田植え作業姿勢の異同をモーションキャプチャの解析で比較する、電源開発や構造改善事業による農地環境の変化が、農法・農具にどのような影響を与えたのかなどいくつかの研究指標をたてたが、他班の成果と関係させて地域情報を統合的に関係付け発信するには至らなかった。そこで、只見町の住民自らが整理した約8000点の民具カードのデータベース化を中心に据え、民具に込められた地域情報を最も有効に公開する方法としてインターネット・エコミュージアムというシステムを構想し、その開発を行った。すべての民具を扱うわけにはいかず、画像では屋根葺き職人関係の民具を事例とし、そこに登場する民具の検索からその民具に関係する世界が広がり、地域性の一端がわかるようにした。この間班員は、只見町の折々の生産活動、年中行事の調査をはじめ、古老からの聞き書き等のフィールド調査、民具撮影、民具記録カードのデータベース化、諸資料の映像コンテンツ化などの室内作業に取り組んだ。

この試みは当初の目的からは遥かに遠いが、構想だけは示せたものと考え、また、地域研究と情報工学、文系理系の学問の結合はもとより、大学と地域社会との連携、科学的知識と生活の知恵の総合化という新たな知のイノベーションに結びつく契機となるものと考えている。

研究成果

2006年度にシンポジウム「民具は世界を結ぶ」を福島県只見町において開催した。また、2007年

度には、第3回国際シンポジウムにおいて、「インターネット・エコミュージアムの可能性—地域研究と情報学の連携—」を報告した。研究成果報告書として、『地域情報学の構築—新しい知のイノベーションへの道—』を刊行した。第4班の目標は地域統合情報発信であり、具体的には福島県只見町において非文字資料を統合し、発信するものであり、インターネット上でエコミュージアムを開館するものである。そのエコミュージアムは完成したというには不十分ではあるが、特定地域において各種資料を総合し、統合して発信することができた。



シンポジウム「民具は世界を結ぶ」



神奈川大学COE 只見町インターネット・エコミュージアム

4班（～2005年度）

- 佐野賢治（事業推進担当者、班代表）
- 中村政則（事業推進担当者）
- 橘川俊忠（事業推進担当者）
- 小馬徹（事業推進担当者＜2005年度＞）
- 田上繁（事業推進担当）
- 齊藤隆弘（事業推進担当）
- 宇佐見義之（共同研究員）
- 金子隆一（共同研究員）
- 木下宏揚（共同研究員）
- 的場昭弘（共同研究員）
- 丸山宏（共同研究員）
- 能登正人（共同研究員＜2004～2005年度＞）
- 大里浩秋（共同研究員＜2003～2004年度＞・事業推進担当者＜2005年度＞）
- 孫安石（事業推進担当者）
- 青木俊也（COE教員＜2004～2007年度＞）
- ウィリアム・リンゼイ（調査研究協力者＜2004年度、2005年度＞）

- 木下慶子（調査研究協力者＜2005年度＞）
- 小松大介（調査研究協力者＜2005年度＞）

4班（2006年度～）

- 佐野賢治（事業推進担当者、班代表）
- 中村政則（事業推進担当者＜2006年度＞・共同研究員＜2007年度＞）
- 橘川俊忠（事業推進担当者）
- 木下宏揚（共同研究員）
- 能登正人（共同研究員）
- 佐々木長生（共同研究員）
- 田島佳也（事業推進担当者）
- 廣田律子（事業推進担当者）
- 八久保厚志（共同研究員）
- 長瀬一男（共同研究員）
- 平井誠（共同研究員）
- 海賀孝明（調査研究協力者）
- 小松大介（調査研究協力者＜2007年度＞）
- 新国勇（調査研究協力者＜2007年度＞）
- フレデリック・ルシーニュ（調査研究協力者＜2007年度＞）
- 小野地健（COE研究員（PD）＜2007年度＞）

V 第5班 実験展示

研究経過

[1. 展示]

本COE発足時から重要な柱として設定されていたのが、研究成果を展示という方法で発信することであった。本プログラムの研究は、膨大な非文字資料の中から図像、身体技法、環境・景観の三つを選択し、それらの事象の資料化、分析、情報発信を行うものであるから、一般的な研究成果ではなく、限定され明確になった研究成果である。三つの事象の中から身体技法を中心に据え、3者を統合することを構想して、展示計画が練られた。4年度から具体的な展示計画に取り組むべく、それまでの情報発信班から独立して一つの班を形成し、課題に取り組んできた。そして、非文字資料研究の成果発信としては従来試みられることの少なかった展示という手法を選択したことの意味を問いながら、研究会を重ね展示構想の策定を進めた。

身体技法という具体的なテーマを設定した上で、この展示が研究者という枠を超えた人々に、非文字資料の存在とそれが切り拓く可能性について論議を深め、それらを直接発信する装置の有効性を検討した。各自それぞれ企画案を提示・検討し、テーマを身体技法の中でも最も基本的な「歩く」に絞り、「あるく—身体の記憶—」の展示構想を固めた。

この展示は、観覧者がそれぞれの身体の記憶を意識化する場として用意した。展示資料は図像資料を中心とすることで、「非文字資料を用いた展示」という新たな挑戦を試みた。

また、展示に本学の学生をはじめ市民や研究者など外部の多様な人々の参加を得ることができた。さらには観覧者の展示評価を展示にフィードバックするという仕組みを通して、観覧者の展示への参画の筋道を設けた。この展示では文字情報をできる限り排し、参加型展示、触る展示といった展示手法を試みることにした。

[2. 高度専門職学芸員の養成]

高度専門職学芸員養成策を検討することは、本プログラムの当初計画にも位置づけられ、5年間の研

究を経て、具体的な大学院博物館学芸員課程の開設を構想していたが、制度的改変を伴うことであり、実施は困難が見込まれたので、提言をとりまとめて参考に供することとした。

最初の3年間は第4班の一部として共同研究を展開した。その段階では、学芸員養成課程のあり方を中心に、フランス・オーストリア・ドイツ・アメリカの博物館を調査し、地域と大学博物館の連携の必要性などの課題を得た。そして、4年度目から独立して、研究成果を展示という方法で統合する実験展示班の活動の一つの柱となった。そこでは、大学院における高度専門職学芸員の養成について検討し、当初計画を達成すべく努力した。

まず学芸員養成の現状を把握するために、このカリキュラムをもつ大学院への調査を行い、文部科学省、学術会議、博物館学会、さらには日本博物館協会などで蓄積されている学芸員養成に関わる情報を収集し、その動向について分析を進めた。

近年学芸員の高度化、専門化の必要性についての指摘はあるものの、専門性そのものの論議の深まりがみられない。それは、関連領域の問題が広く介在し、一つの結論に達することが困難なことを示している。そこで博物館学の研究者、学芸員の養成に関わる教員、現場の学芸員といったそれぞれの視点からの論議を交わすために、「学芸員の専門性をめぐって」と題する公開研究会を開催し論議を深めた。

研究成果

[1. 展示]

実験展示「あるく—身体の記憶—」を2007年11月1日から30日までの1か月間、学内の常民参考室において実施した。展示には、横浜市内、神奈川県区内といった地域の人々や本学の学生など、研究者の枠を超えたさまざまな人々が観覧者として足を運んだ。展示を見る人々との交信のありようが一つの研究成果ともなりえた。

この展示で発信したのは、図像資料を通してたどり着いた「かつての私たちの歩き方」に「世代を超えて私たちの身体に伝えられたもの」がみえるかどうかの問いかけであった。新しい試みは、観覧者が

さまざまな歩き方の実演を含んだ映像プログラムに沿って実際に歩くことにより、自らの身体を使って発信者からの問いかけを検証するものであった。それと同時に第三者による展示評価によって、新しい試みの成果を検証した。このような方法により、展示への同意や異議を踏まえて、展示を見直し再発信することを行った。この点は刊行物などによる一方向からの発信とは異なり、展示が相互確認の場となりえたのである。

それはまた、この展示が「歩く」研究の実験、検証の場となりえたことを示しており、そこに「身体技法」、さらには「非文字資料」研究の方法の問い直しを含め、今後への新たな視点をもたらすことへの可能性を確認した。

展示の記録保存を『実験展示「あるく—身体の記憶—」をつくる』の刊行と映像による記録（DVD）により進めた。研究成果の発信である以上、展示終了後も検証を可能にしておくことは欠かせないが、展示は発信装置としてだけでなく、展示そのものがつくる過程も含め研究成果として蓄積され発信されるべきとの提言を込めた。

〔2. 高度専門職学芸員の養成〕

提言を記した報告書として『高度専門職学芸員の養成—大学院における養成プログラムの提言』をとりまとめた。そこで以下の提言を行った。

第一の提案は現行の歴史・民俗系の研究科を例に、高度専門職学芸員養成を図るためにはどのようなプログラムを新たに追加すべきかという点である。現在修士課程修了の学芸員が増えつつあるにも拘わらず、大学院においては歴史学、民俗学などの研究領域の専門性を高めるのみで学芸員の専門性を高めるためのプログラムが用意されていない。この現状を踏まえ、実現性の高い具体的なカリキュラムを提示した。

第二は博物館学大学院新設の提案である。高度専門職学芸員養成には必要なカリキュラムを担う研究者の育成が不可欠であり、いまだ博物館学研究科を設置するところのない現状への問題提起を行った。そして、博物館学の専門研究者を養成すると共に、博物館の学問体系を完成させ、深める研究機関とし

ての大学院博物館学研究科の必要性とその具体像を提示した。今回は具体的なカリキュラムの提示はしていないが、いずれ検討すべきことが予測される課題である。

現在、文部科学省では上級学芸員といった新たな高度専門職としての資格の制度化を検討中であり、いずれそれへの対応を含めたカリキュラムの再検討を要するが、現状に即した提言の素材となるよう、大学院における現状についての報告と学芸員の専門性を問うた研究会の記録を取めた。



班研究会



展示準備風景

5班 (2006年度～)

中村ひろ子 (COE 教員、班代表)

福田アジオ (事業推進担当者)

河野通明 (事業推進担当者)

刈田均 (共同研究員)

榎美香 (共同研究員)

青木俊也 (COE 教員)

浜田弘明 (COE 教員)

田上繁 (事業推進担当者)

丸山泰明 (COE 研究員 (PD) <2006年度>)



研究成果報告書

『実験展示「あるく—身体の記憶—」をつくる』

『高度専門職学芸員の養成—大学院における養成プログラムの提言』



実験展示「あるく—身体の記憶」外看板

VI 第6班 理論総括研究

研究経過

理論総括研究班の課題は、非文字資料とは何かを考察し、非文字資料研究の方法を整序し、非文字資料の体系化への筋道をつけ、さらにそれが人類文化の研究にとってどういう意味があるかを明らかにすることにある。非文字資料のように、これまで自覚的かつ意識的に取り上げられることが少なかった資料を対象とする研究の場合、なによりも個々の非文字資料に即した個別的研究の蓄積を前提にはじめてそのような課題への取り組みが可能になる。もちろん、少ないとはいえ、これまでなされてきた研究の成果を検討することや抽象的レベルでの考察も必要であろう。理論総括研究班は、本プログラムにおいて推進されてきた個々の非文字資料の研究状況を検討しつつ、そうした作業も行ってきた。

しかし、理論総括研究班としては、あくまで自分の経験、研究成果に依拠しつつ、その一般化を中心的課題として自らに課してきた。したがって、本班は、各班、各課題の動向に注目し、適宜各班・課題からの報告を受け、それを素材として考察を進めるという方向を選択した。また、各個別研究班・課題が、自らの経験を理論的に整序し、問題提起することを薦めてきた。

実際には、各年度の全体研究会における各班からの報告を受け、全体的研究状況の把握に努め、国際シンポジウムなどへも積極的に参加し、理論的に考察を加えるべき素材を収集してきた。さらに、4年目からは、個別テーマの研究の進捗を前提として、各班の代表者による報告を中心とした研究会を開催し、個別資料の研究から生じた問題点を整理し、「非文字資料の体系化」という困難な理論的課題に取り組んできた。

研究成果

本班の研究成果は、すでに国際シンポジウムあるいは全体研究会の報告・コメントなどの形で発表してきたが、最終的には、研究成果報告書『非文字資料研究の理論的諸問題』としてまとめた。

本論集に収載した三つの論文は、少数とはいえ、そうした活動の成果である。まず、非文字資料の認識論的基礎を哲学史あるいは認識論史的観点から論じ、非文字資料の研究成果が人類の知的財産として認知されるために不可欠の課題に挑んだ論文、つぎにそれへの批判の形をとって自らの研究の経験を普遍化し、非文字資料研究の具体的進展に資するために執筆された論文、さらに、本プログラムの全体状況を鳥瞰しながら、「人類文化研究のための非文字資料の体系化」というタイトルに掲げられた課題への理論的諸問題を整理し、さらなる理論形成へ展望を開く試論が展開された。

「ミネルバの梟は夕暮れに飛び立つ」ということわざがあるように、体系的理論の形成は、その領域の研究がある程度完成に近づいたときにのみ達成される課題であるとすれば、非文字資料の本格的な体系的研究は、本プログラムにおいてはじめて取り組まれた課題であり、完成に近づいたとは到底いえないが、今後の課題や方向性を提示することができた。

6班 (2006年度～)

的場昭弘 (事業推進担当者)

福田アジオ (事業推進担当者)

香月洋一郎 (事業推進担当者)

橘川俊忠 (事業推進担当者)

鈴木陽一 (事業推進担当者)

小馬徹 (事業推進担当者<2006年度>)

齋藤隆弘 (事業推進担当者)

能登正人 (共同研究員)

フレデリック・ルシーニュ (COE研究員 (RA) <2006年度>)